

2. 中心市街地・生活中心街の特性



息子(高校生)「府中は、歴史あるまちだと聞けど、住んでいても良く分からないんだよね。」



父(50代) 「じゃあ、府中のまちなかの成り立ちを学んでみよう。」

■古代の都市に由来するまちづくり

「府中」の始まりは、古代に都と九州の大宰府(福岡県)を結ぶ主要幹線道路である古代山陽道が設置され、続けて「備後国」(現在の広島県東部)の行政府である「備後国府」が置かれたことに由来します。府中市街地は備後国内で歴史上初めての地方都市となり、平安時代にいたるまでの約500年間にわたり備後地域の政治・経済・文化の中心地になりました。

「備後国府」が国の役所として、どこに・どのように営まれたのかという課題に対する長年の調査・研究の結果、「備後国府」の痕跡が、元町や府中町の市街地北側で発見されました。中心部の建物施設の向きは、東西南北に合わせて造営されていたことが分かっています。元町の一帯には、現在も、周囲とは異なる東西南北に方位をとる町割りが見られますが、古代の都市計画が引き継がれてきた結果といえます。さらに、生涯学習センター(TAM)と文化センターの南側にある“であいの広場”と“はじまりの広場”では、「古代山陽道」も確認されました。この発見により、現在のJR府中駅南側の市道が、市街地に残された「古代山陽道」の痕跡であることが判明しました。現在見られる碁盤の目のようなまちなみは、この「古代山陽道」を基準として形成された土地の区画(条里地割)が、後の時代にも受け継がれたものと考えられています。

このように、現在の府中市街地は、古代には、国司となって都からそれぞれの国に赴く貴族たち、遣唐使や海外からの使節、都に税や貢物を運ぶ庶民の一行ほか、多くの人たちが立ち寄り行き交う場所でした。10世紀以降、律令制度が形骸化するとともに、国府は次第に国の役所としての役割は衰退します。鎌倉時代には、「国衙」と呼ばれる役所の施設や所有する土地は残り、年貢の徴収などの実務に地元の役人が当たっていましたが、次第に武家の勢力に支配されるよ



古代備後国と古代山陽道



はじまりの広場付近から見た備後国府
(画：早川和子)

うになり、わずかに残った役所機能も消滅していきます。鎌倉時代の武家の地方支配拠点である「守護所」の位置は特定されていませんが、14～15 世紀の資料に「備後符中」や「備後国府城」の記録が見られることから、府中市街地が鎌倉時代以降もしばらくは備後の中心的拠点「府中」として存在し、市場等が営まれて人や物資・情報が集積する場所としてあり続けたという歴史的背景によって、「府中」という現在の地名となりました。

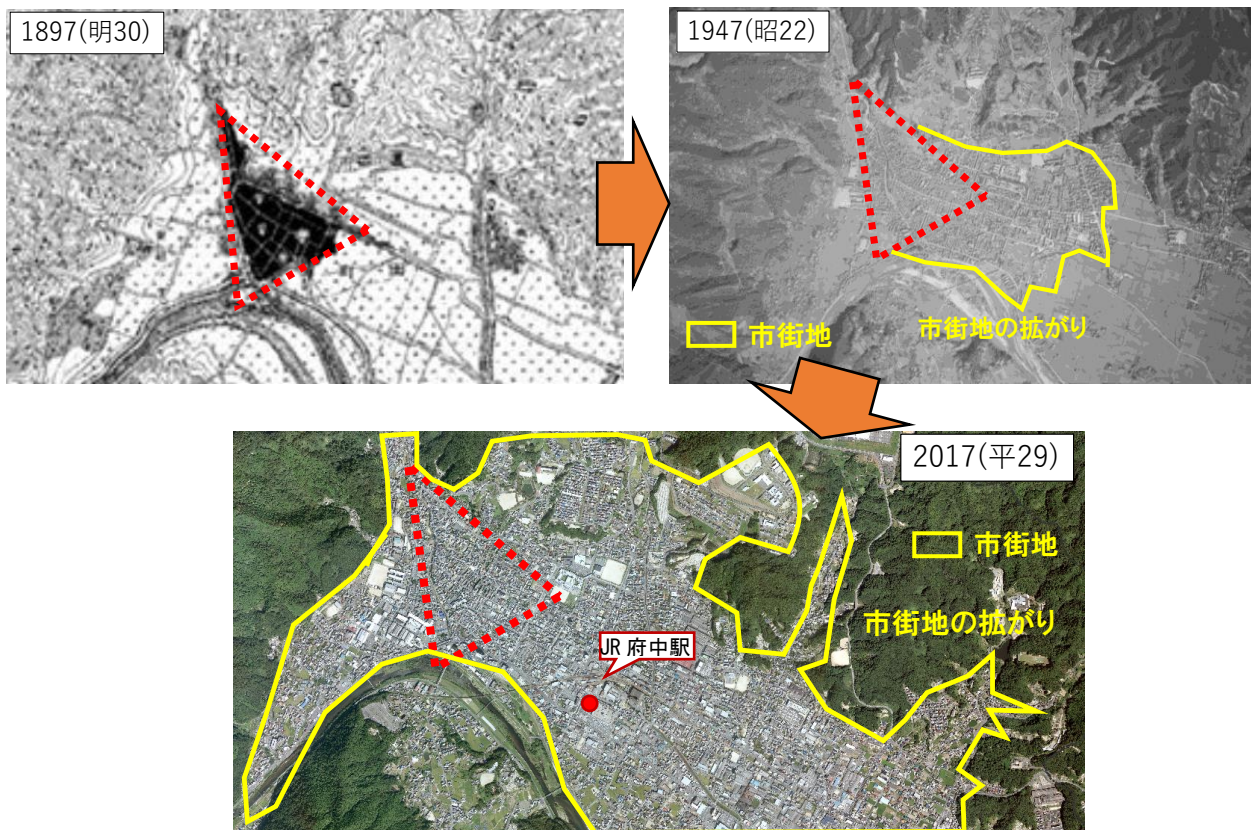
■近世以降のものづくりのまちの進展

江戸時代になると、瀬戸内側と日本海側を結ぶ主要街道である石州街道（雲石街道）の宿駅が設けられ、出口町から府中町の一帯は、街道沿いの宿場としても賑わい発展しました。

中世から物資の集散地であり、周辺の綿やたばこ・藍・木材・米や大豆や塩などの農産物が集まりやすい環境であったこと、集まった産物を利用した加工が早くから行われていたことから、備後絣などの綿織物、備後葉と呼ばれたタバコ製造、長持ちや指物などの木工、府中味噌などの醸造業などが家内工業として盛んに行われていきました。

近代に入っても、府中市街地は芦田郡の中心地であり、明治 11 年（1878）に安那・品治・芦田 3 郡の郡役所が置かれました。明治 23 年（1890）には、新たに郡会が設置されて郡が自治体としての性格を持つようになるとともに、全国で郡の整理統合が進められた結果、明治 31 年（1898）に芦田郡と品治郡が合併し芦品郡が誕生しました。明治 36 年（1903）新しい郡役所は、当時郡内で最も繁華な府中町の通りの東端に建てられ、以後、府中近代化の拠点、近代府中の新市街地形成の中核になっていきます。

このほかにも、明治 31 年（1898）には府中葉煙草専売所の設置、明治 32 年（1899）の備後銀



市街地拡大の変遷

【出典】 国土地理院：地形図・地勢図図歴、航空写真



石州街道と石見銀山街道



大正3年(1914)の両備軽便鉄道開通記念祝賀行事の府中町駅前

写真転載：「目で見える福山・府中の100年」郷土出版社 1997

行の設立、大正3年(1914)の両備軽便鉄道府中町駅の開業、女学校の開校のほか各種産業の工場建設が行われるなど、府中の近代化が着々と進められていきました。

また、産業面でもこれに呼応するように、江戸時代には家内工業として行われていた伝統産業が、電力の確保やそれに伴う工業化、鉄道整備による素材や製品の運搬機能の拡充などにより、近代的な発展を遂げていったほか、新たに金属工業なども加わります。

現在、府中市の主要な地場産業には、衣服縫製や桐箱、味噌など江戸時代の伝統から発展した特産品のほか、機械・金属・化学・ゴム製品なども存在しています。さらに、高級婚礼家具・非鉄ダイカスト製品・ラジコンヘリコプター・など特色を持った工業製品もあります。

市内の企業のうち63社(2020年度現在)は100年企業で、大半が市街地に存在します。これらの企業は、古くは江戸時代末から、明治維新や近代・現代に至る激動の時代を、自らの知恵と技術を結集し、企業の魅力に磨きをかけることで乗り越えてきました。

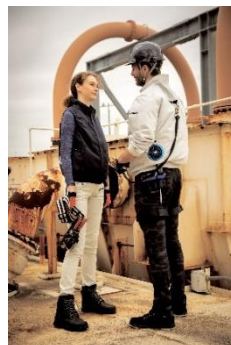
古代、「備後国府」の様々な工房におけるものづくりが起点となり、今日の多種多様な“企業のまち”“ものづくりのまち”が形成されてきたといえます。



府中家具



府中味噌



ワーキングウェア



ダイカスト製品



スピングルムーブ



ラジコンヘリコプター



旋盤用パワーチャック

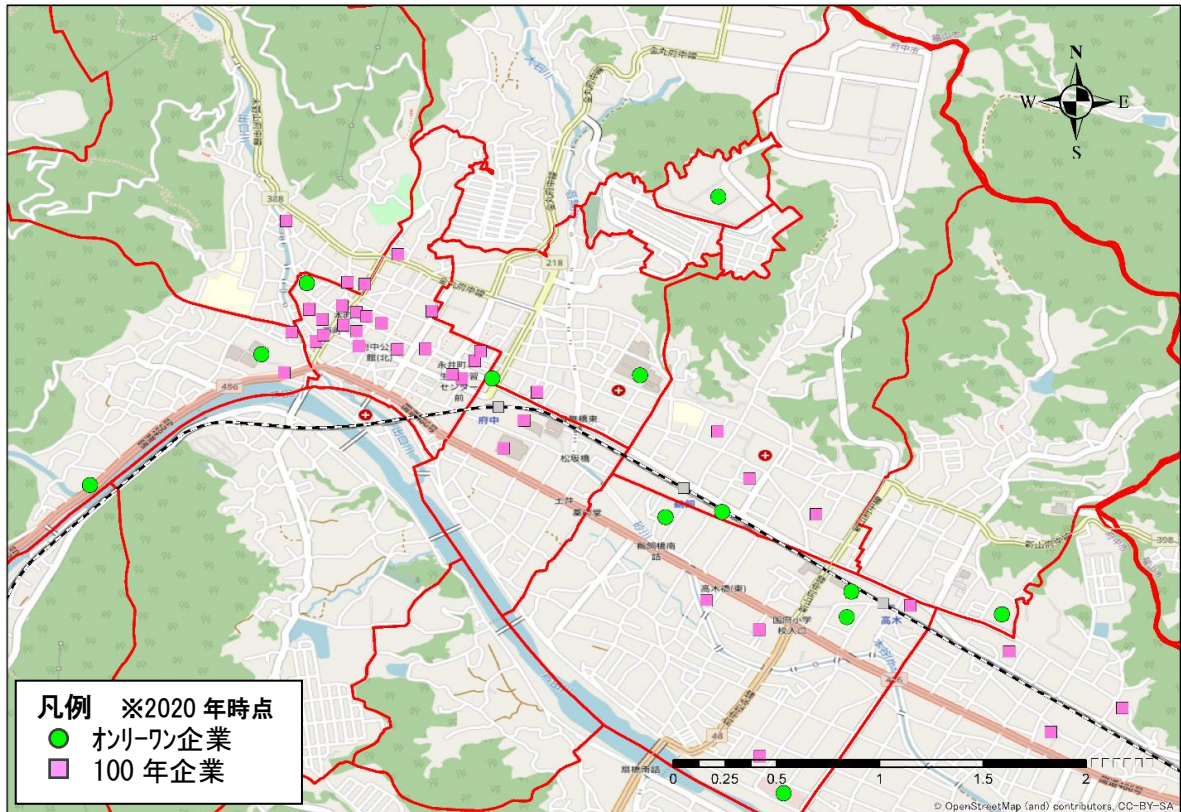


図 オンリーワン・ナンバーワンの製品・技術を持つ市街地に位置する企業

(資料) 広島県 HP「広島県の「ものづくり」～オンリーワン・ナンバーワン企業等紹介」、「府中商工会議所ハンドレットクラブ登録企業名簿」より ESRI 社の ArcGIS を用いて作成

■近世以降のまちの形成と近年のまちなかの変化

江戸時代、出口町や府中町の一部で街道に沿った宿場町としてまちなみを形成していた府中の町は、明治以降の近代化の進展の中で、郡役所や両備軽便鉄道府中町駅などを中核として東に拡張されていきました。それは、時代ごとの地図を見るとよく分かります。その結果、府中の市街地には、近世から近代さらに現代にわたり、各時代の建築物や街並みが連続し、職と住が接近したレトロでノスタルジックな景観が残されています。

なかでも、明治5年(1873)石州街道沿いに創業して以来、犬養毅、岸信介といった総理大臣経験者をはじめとした著名な文人や政治家も利用し備後を代表する格式高い老舗割烹旅館として多くの人に親しまれてきました「恋しき」でしたが、平成2年(1990)、惜しまれつつ廃業しました。また、明治以来の歴史を刻んだ日本たばこ産業株式会社府中工場も平成16年(2004)に閉鎖されるなど、まちなかの急速な空洞化が懸念されてきました。

「恋しき」は、平成17年(2005)以降、地元有志により株式会社恋しきとして設立され、国の登録文化財、観光商業の複合施設として建物や庭園の保存・活用が取り組まれています。日本たばこ産業株式会社府中工場跡地は、平成20年(2008)に市立の小中一貫校となる「府中学園」が開校し、府中市の新たな教育の拠点施設となりました。

さらに、地域と連携した出口地区における旧石州街道の修景整備事業のほか、「お祭り広場」や「府中市地域交流センター」、芦田川河川敷近くに「府中市こどもの国」、JR 府中町駅周辺に「府中市生涯学習センター」や「道の駅びんご府中」が整備されるなど、まちなかで人が活動し、子どもたちの声が聞こえる賑わいのあるまちづくりが行なわれています。



娘(20代)「私、通っていた学校が統合されて、府中学園に通うことになったんだよね。小さい頃は、こどもの国でよく遊んだよ、あの辺りは自然もたくさんあって、子ども連れの家族や小学生とかに人気だよ。」



父(50代)「石州街道は昔よりまちなみがきれいになったな。お店は少なくなったけど、通り沿いの家はきれいに整ったな。お祭り通りはすごく便利になったよ。」



母(40代)「わたしは、大型の商業施設辺りがもう少し便利になると助かるわ。あと、図書館には広い駐車場があれば便利かもね。」



父(50代)「そうだね、まちなかが変わってくると、もっと楽しく住みやすいまちになるんじゃないかな。それから、市街地の拡大とともに、まちの産業も発展していった歴史は、産業・暮らしを変えようという当時の人たちの強い想いと精力的な活動があってこそだったと思うんだ。だからお前もこうしたい、変えていきたいという想いを持ったら、このまちを変えていける可能性は広がると思うよ。」

■価値の創出に向けた地区の考え方

中心市街地・生活中心街の成り立ち・特性を踏まえて、「出口地区～本町商店街周辺地区」や、「はじまりの広場～備後国府跡周辺地区」では、これまでの歴史・文化的価値を大事にしつつ、将来的にもそれらを活かしながらか価値を高めていく地区になります。

一方で、「府中駅周辺地区」や「こどもの国～芦田川河川敷周辺地区」では、官民による連携のもと、日常生活において利便性が高く、魅力的で新しい価値を創出する地区になります。

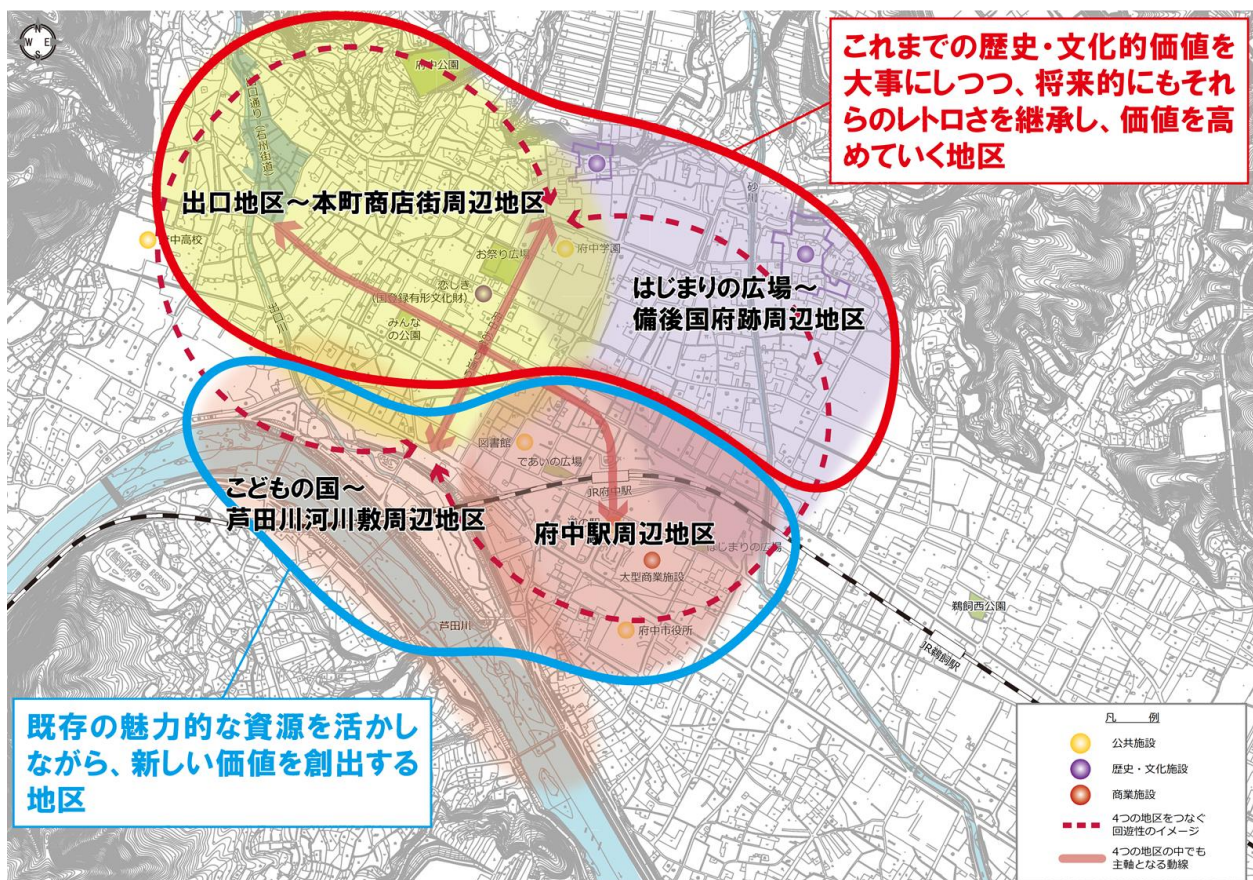


図 中心市街地・生活中心街のエリア価値の創出

